

令和 6 年 5 月 30 日現在

機関番号：34310

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13637

研究課題名（和文）東南アジアにおける過激主義の展開と脱過激化をめぐる政治

研究課題名（英文）The spread of Extremism and the Politics of De-radicalization in Southeast Asia

研究代表者

西 直美（Nishi, Naomi）

同志社大学・研究開発推進機構・共同研究員

研究者番号：50822889

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：タイにおいて、脱過激化をめぐる政治は、とりわけイスラーム教育の場を舞台に展開してきた。本研究では、マレーシアとの国境に位置するタイ深南部を中心に、ナショナリズムとイスラーム主義が果たした役割について検討を行った。イスラーム復興の流れで台頭した原典回帰志向を強くもつサラフィー主義はむしろ、タイの文脈で過激主義とみなされてきたマレー・ナショナリズム運動を相対化し、マレー・ムスリムのタイへの統合を進めた側面がある。さらにマレー・ナショナリズムは、深南部のムスリム社会にグローバルなジハード主義が浸透することを防いだ側面があることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

タイ深南部に関する研究では、これまで紛争やナショナリズムに注目が集まってきた。本研究はイスラーム主義の観点から、深南部問題を読み直すことを試みた。何を「過激派」とみなすか、それ自体が政治であり、時代によっても国によっても異なる。9.11以降、世界的に過激派の代名詞ともみなされたサラフィー主義は、タイの文脈ではイスラームを強調することで民族を相対化し、むしろ脱過激化を促進する動きであると捉えられた。それに対して過激主義だとみなされてきたのが、マレーナショナリズムである。また、日本では研究蓄積がなかった地域であり、まとまった著作として出すことができた意義は大きい。

研究成果の概要（英文）：In Thailand, politics surrounding de-radicalization has particularly unfolded in the arena of Islamic education. This study examines the roles played by nationalism and Islamism, focusing on the southernmost region of Thailand bordering Malaysia. Salafism, with its strong emphasis on original sources, which gained prominence in the wave of Islamic revival, has, in fact, contextualized and advanced the integration of Malay Muslims into Thailand by counterbalancing the Malay nationalist movement, which has been perceived as extremist within the Thai context. Furthermore, Malay nationalism has revealed its role in preventing the infiltration of global jihadist ideologies into Muslim society in the deep south.

研究分野：地域研究

キーワード：ナショナリズム イスラーム主義 タイ 深南部 伝統派 改革派

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 過激主義と脱過激化

テロリストやテロ行為の制圧の効果が疑問視されるなかで、過激主義やテロリズムを防ぐことを念頭に置いた脱過激化が注目されるようになった。脱過激化とは、テロリストの社会復帰プログラムを中心とし、より広義には人々の過激化を防ぐことを念頭に置いた各種政策のことである。何が過激主義であり、誰がテロリストなのかという定義そのものが政治の産物であり、その定義によって脱過激化のターゲットも当然異なる。

タイからの分離独立運動が続く深南部3県(パッターニー、ヤラー、ナラーティワート)において、政府によって過激主義とみなされてきたのはマレー・ナショナリズム運動であり、脱過激化は主に教育を通して行われてきた。タイにおいてイスラームへの関心が高まったのは、タイ政府とイスラーム系武装組織との間での抗争が激化した2004年以降のことである。アルカイダなどグローバルなジハード主義の影響が懸念されるようになったものの、研究開始当初には、依然として研究はマレー・ナショナリズム運動に集中しており、深南部にグローバルなジハード主義の影響はないことが指摘されていた。

(2) マレー・ナショナリズム研究の問題点

タイ語、マレー語、英語を含め、タイ深南部に関する豊富な研究蓄積が存在しているが、なかでも多くを占めているのが政治、とくにマレー・ナショナリズムに着目する研究である。これまでの研究では、なぜ深南部で分離独立運動が生じているのかという問いに対し、国家のマイノリティ集団に対する同化・統合政策と、その帰結としての分離独立運動やマイノリティとしての帰属意識の高まりに関する研究が行われてきた。タイ政府による統治の是非を問う議論には体制派・反体制派といったイデオロギー的な対立が反映されるケースもある。これらの研究では、マイノリティとしてムスリムやイスラームが一枚岩的に扱われることから、深南部のムスリム社会内部で拡大するサラフィー主義の影響が等閑視されていた。

(3) タイのサラフィー主義研究

サラフィー主義は、イスラームの原典であるクルアーンとハディースに依拠した実践の改革を伴う思想潮流・運動である。サラフィー主義はしばしばイスラーム過激派の代名詞として用いられ、国家安全保障に対する脅威として捉えられてきた。しかし、深南部問題をタイ政府の統治の正統性という観点からいち早くまとめたマッカーゴ(2008)においても、サラフィー主義はタイ政府との間で問題を抱えていないという点が指摘されていた。

さらに2010年代になると、タイ・ムスリム自身による、タイのサラフィー主義に着目した研究が登場した。自身がタイのムスリムであるムハンマドイヤース・ヤプルン(2014)とハーフィズ・サレ(2017)は、サラフィー主義がタイで受容された背景について、指導者や政治運動に着目しながら論じている。しかし、国家レベルにおける協調が成功したことが明らかになったとしても、実際に分離独立運動が生じてきたタイ深南部においてサラフィー主義がどのように受け入れられ、マレー・ムスリムの統合に対してどのような役割を果たしているのかについては十分に検討されていなかった。

2. 研究の目的

以上を踏まえて、研究開始当初に設定した問いは、なぜ特定の地域にはグローバルなジハード主義の影響がないのか、というものである。諸外国では政府を転覆する方向で働きうるために安全保障上の脅威とみなされることが多かったサラフィー主義が、なぜタイでは政府と協調関係にあるのか。タイ政府と深南部のムスリムが取り結んできた関係、そしてマレー・ナショナリズムはその過程で、どのように変容してきたのか。宗教と「過激主義」の問題を、東南アジア地域の文脈、とりわけマレー半島とタイ深南部の事例においてとらえなおすとともに、ナショナリズムとイスラーム主義がともにグローバルなジハード主義の防波堤となった可能性について考察することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 文献調査

ナショナリズムに関する豊富な研究蓄積に加えて、2000年代以降、サラフィー主義やイスラーム主義に関する成果が増え、各国・地域の事例を踏まえたサラフィー主義内部の潮流やその多様性に関する研究も進んだ。こうした成果も踏まえつつ、タイ深南部の文脈でサラフィー主義が登場した背景とその主張についての文献調査を行った。タイ国立公文書館、チュラーロンコーン大学図書館、マレーシア国立文書館においても資料収集を実施した。

(2) インタビュー調査

タイ深南部でサラフィー主義が登場した背景に加え、イスラームをめぐる解釈の違いがムスリムコミュニティ内部および、ムスリムとタイ政府との関係性にどのような影響を及ぼしてき

たのかという点について考察するため、特にイスラーム教育に関わる人々へのインタビューを行った。2020年3月以降、新型コロナウイルス感染症の拡大によって現地調査が困難となったため、インタビューはオンラインでの調査に切り替えて実施した。

4. 研究成果

(1) 主な成果

イスラームの解釈をめぐる何が過激とみなされているのかが、政府と深南部社会において異なっていること論じたのが「イスラーム的価値観をめぐる相違と「過激化」問題：タイ深南部におけるサラフィー主義の受容に着目して」である。サラフィー主義はイスラームを上位にかかげることでマレー・ナショナリズム運動から距離を取ってきたため、タイ政府と敵対することがなかった。一方でサラフィー主義が非難し、改革の対象としたのが伝統的なマレーの文化であったために、現地の社会で軋轢を生み出した。本論文で提示したアイデアを維持しつつ、その後の文献調査とイスラーム教育者へのインタビュー調査の結果を大幅に加筆して、単著『イスラーム改革派と社会統合：タイ深南部におけるマレー・ナショナリズムの変容』にまとめた。

(2) 国内外における位置づけとインパクト

日本語でタイのイスラームについて書かれた学術書は少なく、タイ深南部について体系的に扱われた書籍は皆無であった。2004年以降、テロリズム研究を含めて爆発的に増加したタイ深南部研究の世界的な潮流を鑑みると、日本での研究は立ち遅れたものと言わざるを得ない状況があった。また、タイを含む海外においても、イスラーム復興に関する研究は、前述のヤブロン、サレを筆頭に指導者層や政治運動に着目した研究成果が2010年代に始まったばかりであった。いずれの成果もムスリム当事者によるもので、サラフィー主義運動がタイにおいて受容された背景を論じている。

本研究は、イスラーム指導者のカリスマ性や社会運動が成功した背景だけでなく、その結果として市民のレベルにおいてどのような反発や変化があったのかという点について考察を行った。分離独立運動の展開において、タイ政府が最も大きな脅威とみなしてきたネオルアム(支持者の意：深南部の文脈では分離独立運動に対する支持者という意味で用いられる)の問題にも切り込むものである。

タイにおいてイスラームに対する関心が高まったのは、1990年代の湾岸戦争、とくに2001年の9・11同時多発テロ事件以降、さらに2004年以降に深南部紛争が激化したことによるものであった。2004年以降、深南部紛争に関する研究は爆発的な増加をみせている。アルカイダやJIなど国際テロ組織の動きに着目するテロリズム研究では、現地の実情を理解しない研究者によってグローバルなジハード主義の影響が指摘され、政府関係者や社会が混乱に陥った。テロリズム研究を除くタイ深南部に関する研究では、タイが近代国民国家としての歩みを進める過程において周縁化された「ムスリム・マイノリティ」の帰属意識が問題とされる構図は、それ以前の研究を継承するかたちで続いている。

本研究は、地域研究的な視点のみならず、イスラーム復興に注目することによって、より広くイスラーム世界のなかにタイ深南部を位置付けて捉えることを試みたといえる。2019年6月11日にチュラーロンコーン大学で開催された国際シンポジウム Female Agency, and Islamic Activism: Thai Case Studies in Localizing the Global において、単著の一部の成果について発表を行った際、タイにおけるイスラーム復興に関する研究を牽引してきたヤブロン、サレ両氏から評価を受けることができた。

(3) 今後の展望

2020年、新型コロナウイルス感染症の拡大で、2004年に紛争が激化して以降もっとも「平和」な年となった一方で、現地の人々の生活は大きな打撃を受けている。2023年の総選挙では、政治的に覚醒した若者たちによるマレー文化の主張や、議会政治の場での闘争を模索する動きが顕著になった。この点については共著『ASEANの亀裂と連結：国際政治経済のなかの不確実な針路』においてまとめた。マレー・ナショナリズム運動とは距離を取ってきたサラフィー主義であるが、近年、両者の歩み寄りも見られるようになっている。こうした深南部の社会変化が、政治動向にどのような影響を与えるかという点については今後注視していく必要がある。

引用文献

- Duncan McCargo (2017) *Tearing apart the land: Islam and legitimacy in Southern Thailand*, Cornell University Press
- Muhammad Ilyas Yahprung (2014) *Islamic Reform and Revivalism in Southern Thailand: A Critical Study of the Salafi Reform Movement of Shaykh Dr. Ismail Lutfi Chapakia al-Fatani*, PhD thesis, Islamic University of Malaysia
- Salae, Hafiz (2017) *The Political Accommodation of Salafi-Reformist Movements in Thailand*. PhD thesis, University of Leeds.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 Kawashima Midori (editor), Oman Fathrahman, Kobayashi Masahsi, Nishi Naomi, Ervan Nurtawab and Ogawa Hisashi	4. 巻 42
2. 論文標題 The Collection of Islamic Books from Bangkok, Thailand, at Sophia University: A Catalogue with Comments	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 SIAS Working Paper Series	6. 最初と最後の頁 1-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 西直美	4. 巻 16
2. 論文標題 タイにおけるイスラーム復興のねじれ現象	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 一神教学際研究	6. 最初と最後の頁 21-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Naomi Nishi	4. 巻 16
2. 論文標題 Aspects of Islamic Revivalism in Thailand	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of the Interdisciplinary Study of Monotheistic Religions	6. 最初と最後の頁 23-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 西直美	4. 巻 11号
2. 論文標題 イスラーム的価値観をめぐる相違と「過激化」問題：タイ深南部におけるサラフィー主義の受容に着目して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『一神教世界』	6. 最初と最後の頁 34-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 西 直美	4. 巻 1
2. 論文標題 Book Review: Religion and Nationalism in Southeast Asia by Joseph Chinyong Liow, Cambridge, Cambridge University	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Contemporary East Asia Studies	6. 最初と最後の頁 1-3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/24761028.2020.1726555	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件(うち招待講演 0件/うち国際学会 2件)

1. 発表者名 Naomi NISHI
2. 発表標題 Politics of bid' ah in Southern Thailand
3. 学会等名 14th International Conference on Thai studies (ICTS-14) (Online) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 西直美
2. 発表標題 「カウム・ムダ」論再訪：タイ深南部の村落部におけるビドアをめぐる言説に注目して
3. 学会等名 東南アジア学会定例研究会(オンライン開催)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 西直美
2. 発表標題 1980年代以降の“民主主義”とタイ深南部紛争についての考察
3. 学会等名 日本比較政治学会(於九州大学)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 西直美
2. 発表標題 宗教とナショナリズム　　イスラームからみるタイ深南部紛争の諸相
3. 学会等名 日本国際政治学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Naomi Nishi
2. 発表標題 Sectarian Affiliation as Experienced in a Remote Village of “ Supporters ” : A Case Study of Ruesot district, Narathiwat province,
3. 学会等名 International Research Symposium on Female Agency, and Islamic Activism: Thai Case Studies in Localizing the Global, Chulalongkorn University (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西 直美
2. 発表標題 イスラーム的価値観をめぐる相違と「過激化」問題：タイ深南部を事例として
3. 学会等名 同志社大学人文科学研究所第4研究第5回研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西 直美
2. 発表標題 タイ深南部におけるイスラーム改革運動と“ サラフィー主義 ” の台頭に関する一考察
3. 学会等名 日本タイ学会第28回定例研究会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 林田秀樹（編）	4. 発行年 2024年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 324
3. 書名 ASEANの連結と亀裂：国際政治経済のなかの不確実な針路	

1. 著者名 西 直美	4. 発行年 2022年
2. 出版社 慶應義塾大学出版会	5. 総ページ数 280
3. 書名 イスラーム改革派と社会統合：タイ深南部におけるマレー・ナショナリズムの変容	

1. 著者名 久志本 裕子、野中 葉	4. 発行年 2023年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 404
3. 書名 東南アジアのイスラームを知るための64章	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------